論文要旨

新版 K 式発達検査の精密化に関する発達心理学的研究

神戸学院大学大学院人間文化学研究科人間行動論専攻行動発達論講座
大谷　多加志

本研究は、「新版 K 式発達検査」について、その改訂版を作成することを念頭に、検査の精密化について検討するものである。新版 K 式発達検査は、国内において最もよく用いられている発達検査の一つであり、とくに乳幼児期の発達評価で用いられることが多い。

本研究では新版 K 式発達検査の精密化について乳幼児期の検査内容に焦点を当て、既存の検査項目の適切性と、新しい検査項目の設置とその有用性という観点から検討した。新しい検査項目を追加することによって、より多面的で詳細な発達評価が可能になり、既存の検査項目の修正と基準の明確化を行うことによって今の時代や社会環境に合わせた精度の高い発達評価が行えるようになるものと考えられる。

研究 1 および研究 2 では、既存の検査項目の内容について検討した。研究 1 では、新版 K 式発達検査における語定義課題である「語の定義」について、その下位項目の適切性を検討した。語定義課題はさまざまな知能検査や発達検査で広く用いられており、対象者の言語能力を評価する上で有用な課題である。一方で、語定義課題は課題に用いる語（下位項目）によって難易度や適切性が異なる。また、下位項目の適切性はその時々の社会環境や時代背景によって変化するため、用いる下位項目が適切かどうかを検討することは重要である。新版 K 式発達検査 2001 の「語の定義」の下位項目のうち、「電話」は近年機能や形態が非常に多様化しており、「用途」についての説明を行うことを正答の基準とする「語の定義」の下位項目としてはそぐわなくなっている可能性が考えられた。そこで研究 1 では、「電話」に替わる下位項目として、「手紙」と「鏡」を選出し、3 歳 6 か月超から 6 歳 6 か月までの幼児 351 名を対象に「机」、「鉛筆」、「電車」、「人形」と合わせた六つの下位項目からなる「語の定義」の課題を実施し、年齢区分ごとにどのような反応がみられるかを調べた。その結果、「手紙」と「鏡」は他の下位項目と同様に年齢が進むとともに正答率が上昇していくことがわかり、既存の下位項目である「人形」や「机」と類似した正答率となることがわかった。これらの結果から、「手紙」と「鏡」の下位項目は、「語の定義」において適切に利用可能であると考えられた。

研究 2 では、新版 K 式発達検査における列挙課題である「名詞列挙」について、その下位項目の適切性を検討した。研究 2-1 では、新版 K 式発達検査 2001 において用いられている下位項目のうち、「獣、動物」という下位項目が、現在の社会環境では使用に適していない可能性があると考え、検討を行った。「獣、動物」という下位項目の適切性を検討するとともに、代替の下位項目についても検討を行うため、「魚」、「果物」、「動物」、「花」、「野菜」の 5 種類の下位項目について、小学生 578 名を対象に、それぞれのカテゴリー語に対して

どのような語が産出されるかを調べた。多数の反応例を得るため、集団式で実施し、筆記で回答を得た。その結果、「獣、動物」については、学年が上がるごとに「名詞列挙」の正答基準に合致しない反応が増える傾向にあることがわかり、「名詞列挙」の下位項目としては適さないと考えられた。また、代替の下位項目の候補である「魚」と「花」、「野菜」のうち、「魚」については正誤判断が複雑であり、正誤の基準の明確化や反応実例集などの資料の整備などが必要であるものの、「名詞列挙」の下位項目として利用可能であると考えられた。研究 2-2 では、5 歳 0 か月から 11 歳 0 か月の子ども 594 名を対象に、「鳥」、「果物」、「魚」の三つの下位項目からなる「名詞列挙」課題を個別式で実施し、下位項目としての適切性についてさらに検討した。その結果、「魚」の正答率は年齢があがるにしたがって上昇していくこと、「鳥」と類似した正答率になることがわかり、下位項目としての適切性が確認された。

新しい検査項目の追加とその有用性について検討は、研究 3、研究 4、研究 5 において行った。新版 K 式発達検査 2001 では、検査用紙第 3 葉（およそ 1 歳から 3 歳頃達成可能になる検査項目が記載されている）の言語社会領域の検査項目が相対的に少ないという問題があった。この部分に新しい検査項目を設定することができれば、より精密な発達評価が可能になると考えられる。

研究 3 では、1 歳 6 か月児健診など、乳幼児期における発達評価を充実させることを目的とした。研究 3-1 では、子どもの「ふり遊び」の発達に注目し、「慣用操作」、「自己へのふり」、「人形遊び」の課題を作成し、物の手渡し課題である「指示理解」を加えた四つの課題について、乳幼児健診における利用可能性を検討した。1 歳 6 か月児健診において、89 名の子どもを対象に、これら四つの課題を実施した。その結果、「慣用操作」と「人形遊び」は 1 歳 6 か月児健診でのスクリーニングに利用できる可能性が示された。しかし、「自己へのふり」と「指示理解」は通過率が低く、1 歳 6 か月児健診のスクリーニングに用いるには不適当と考えられた。研究 3-2 では、これらの課題が健診後のフォローアップでも利用可能であるかどうかを確かめるために、研究 3-1 とは別に新たに 0 歳 8 か月から 3 歳の子ども 112 名を対象に四つの項目を実施し、年齢別の通過率を調べた。結果として「指示理解」、「人形遊び」および「慣用操作」については、さらなる検討を要する点は残されているが、1歳6か月児健診のスクリーニングやその後のフォローアップに活用できる可能性が示された。その一方で「自己へのふり」は発達スクリーニングや発達検査等の場面での使用に適さないことが示唆された。

研究 4 では、幼児期の発達評価におけるじゃんけん課題の有用性について検討した。対象者は、生後 12 か月（1 歳 0 か月）から 84 か月（7 歳 0 か月）未満の幼児と児童 511 名であった。じゃんけん課題は、じゃんけんの三すくみ構造をもとに「手の形の理解課題」、「勝ち判断課題」、「負け判断課題」の三種類の課題が作成され、各課題の年齢区分別正答率が算出された。また、各課題が達成可能になる発達的な基盤について調べるために、全対象者に新版 K 式発達検査 2001 を併せて実施した。その結果、じゃんけん課題はいずれも 1

歳から 7 歳までに正答率が 0%から 100%まで推移し、「手の形の理解課題」は 2 歳 3.8 か月頃、「勝ち判断課題」は 4 歳 2.8 か月頃、「負け判断課題」は 4 歳 9.5 か月頃に達成可能になることがわかった。研究 4 の結果から、じゃんけん課題はじゃんけんの理解について段階的に評価できる有効な手法であると考えられた。また，じゃんけん課題の成否と新版 K 式発達検査 2001 の発達年齢との間で有意な相関が認められ、発達評価において有効に活用できることが示唆された。

研究 5 では、発達評価における絵並べ課題の有用性を検討した。44 月（3 歳 8 か月）から 107 月（8 歳 11 か月）の幼児および学童児 349 名を対象に、独自に作成した 4 種類の絵並べ課題を実施し、各課題の年齢区分別正答率を調べた。本研究では絵並べ課題のストーリーの内容に注目し、先行研究が用いた絵並べ課題を参考に、4 種類の絵並べ課題を作成した。課題は、ストーリーの内容によって「機械的系列」、「行動的系列」、「意図的系列」の三つのカテゴリーに分類され、最も容易な「機械的系列」の課題によって絵並べ課題の課題要求が理解可能になる年齢を調べ、次に、人の行為や意図に関する理解が必要な「行動的系列」や「意図的系列」がそれぞれ何歳頃に達成可能になるのかを調べた。本研究の結果、全ての課題において 3 歳から 7 歳までに正答率が 0%から 100%近くまで推移し、機械的系列は 4 歳半頃、行動的系列は 5 歳後半、意図的系列は 6 歳半頃に達成可能になることがわかった。また課題間には明確な難易度の差があり、絵並べ課題のストーリーの内容によって課題を解決するために必要とされる知的能力が異なることが示唆され、適切なカテゴリー設定を行うことで絵並べ課題を発達評価に利用できる可能性が示された。

本研究の結果、「慣用操作」、「人形遊び」、「指示理解」、「手の形の理解」、「勝ち判断」、「負け判断」、「絵並べ 2/4」、「絵並べ 3/4」はいずれも新版 K 式発達検査の改訂版において、主として言語理解や社会性の発達を評価する「言語社会領域」の検査項目として利用可能であると考えられた。すなわち、検査用紙第 3 葉においては、「慣用操作」は「1:0-1:3」の年齢区分に、「人形遊び」は「1:6-1:9」の年齢区分に、「指示理解」は「1:9-2:0」の年齢区分に、じゃんけん課題の「手の形の理解」は「2:3-2:6」の年齢区分に、それぞれ配置することが適当であると考えられた。また、検査用紙第 4 葉においては、じゃんけん課題の「勝ち判断」は「4:0-4:6」の年齢区分に、じゃんけん課題の「負け判断」は「4:6-5:0」の年齢区分に、「絵並べ 2/4」は「5:0-5:6」の年齢区分に、「絵並べ 3/4」は「6:0-6:6」の年齢区分に、それぞれ配置することが適当であると考えられた。

検査用紙第 3 葉については、新版 K 式発達検査 2001 において認知適応領域（C-A）の項目数が 33 個であるのに対して、言語社会領域（L-S）の項目数は 18 個であり、検査項目の数が大きく異なることが課題であった。本研究の結果、第 3 葉の言語社会領域の項目数を 22 個まで増加させられる可能性があり、項目数の偏りについて一定の改善が期待できる。また、検査用紙第 4 葉については、認知適応領域と言語社会領域で検査項目の数はそれぞれ 23 個と 27 個であり大きな差はない。しかしながら、言語社会領域の 27 項目のうち、数の理解に関する項目（「数選び」や「13 の丸」など）が 14 項目、文や数の復唱課題が 3 項

目を占め、言語理解や対人・社会性の発達について評価できる課題は相対的に少ない状況であった。本研究で検討してきた「じゃんけん」課題や「絵並べ」課題は、これらの領域を補うことが期待され、新版 K 式発達検査の精密化に寄与できるものと考えられる。

本研究で新しく検討した項目は、いずれも乳幼児期の対人、社会性の発達に関連するものであった。新版 K 式発達検査において対人、社会性の発達と関連すると思われる検査項目は他にも存在するが、それらはすべて子どもの言語反応を評価する課題である。そのため、対人コミュニケーションの問題から、とくに音声言語によるやりとりにおいて適切な表現や説明ができない子どもの場合、習慣や社会的経験として理解していたとしても、検査結果としては評価されない可能性がある。そのため、「習慣・社会的経験・社会スキル」について、言語反応によらない形で評価できることは乳幼児期の発達評価において非常に有用であり、本研究の成果であると考えられる。今後は、臨床例における実践研究や、他の評価尺度との比較検討を積み重ね、これらの検査項目がどのような子どもの発達の側面を評価しているのかという点について、さらに検討を重ねていくことが必要である。